



Data

監督・脚本：蔡明亮（ツァイ・ミンリャン）

脚本：董成瑜（ドン・チェンユ）、鵬飛（ボン・フェイ）

出演：李康生（リー・カンション）
／楊貴媚（ヤン・クイメイ）
／陸奕静（ルー・イーチン）
／陳湘琪（チェン・シャンチー）
／李奕嬪（リー・イーチェン）
／李奕捷（リー・イージェ）
／吳津愷（ウー・ジンカイ）

👁️👁️ みどころ

「郊遊」の日本語訳は「ピクニック」だが、本作は楽しい青春映画とは真逆の暗い暗い、底辺の物語……。そのため、邦題は二転三転したが、台湾の鬼才・蔡明亮監督が「ピクニック」でOKとしたのは一体なぜ？さらに、彼はなぜ本作を最後の作品としたの？

本作ラストに見る超長回しシーンにはビックリだが、それを含めて本作はチヨ一難解。さて、あなたはあなたの感性で本作をどう理解……？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■蔡明亮監督が引退宣言！それは一体なぜ？■□■

台湾の蔡明亮（ツァイ・ミンリャン）監督は、私にとって韓国のキム・ギドク監督と同じように、「鬼才」と呼ぶにふさわしい映画監督。2007年2月4日に、『西瓜』（05年）と『楽日』（03年）（『シネマルーム17』276頁参照）を2本続けて観た私はそう思い、『西瓜』の評論で「ほとんどセリフなしの、こんな独創的な映画をつくれるのは、韓国の天才キム・ギドクか、台湾の天才蔡明亮しかいないから、2人がベネチア・カンヌ・ベルリンの三大映画祭の常連となるのは当然……」と書いた（『シネマルーム17』270頁参照）。

キム・ギドク監督は、2008年公開の『悲夢』（『シネマルーム22』232頁参照）を撮影中に危うく1人の女優が命を落としかける事故によって以降映画が撮れなくなったらしい。そのため、彼は町外れの粗末な小屋に1匹の猫と共に隠遁生活を送ることになり、映画界との接触を一切断った。ところが、その3年間の沈黙を破って登場したのが『アラン』（11年）（『シネマルーム28』206頁参照）だ。これを観れば、何と彼はその隠

通生活(?)中でもカメラを回し続け、映画製作に励んでいたことがよくわかる。しかし、蔡明亮監督の『西瓜』後の作品である『黒い瞳のオペラ』(06年)、『それぞれのシネマ』(07年)の短編『是夢』、『ヴィザーージュ』(09年)を私は全く知らなかったし、本作もつい最近「蔡明亮監督作品!」と聞いてこりゃ必見と思ったもの。

『西瓜』と『楽日』の2本で、蔡明亮監督作品には李康生(リー・カンション)という俳優が不可欠であることはよくわかっていたし、蔡明亮監督作品には楊貴媚(ヤン・クイメイ)、陸弈靜(ルー・イーチン)、陳湘琪(チェン・シャンチー)という3人の女優が常連であることもわかっていた。したがって、蔡明亮監督が2013年第70回ベネチア国際映画祭の会場で突然の引退宣言をした本作では、李康生の他、楊貴媚、陸弈靜、陳湘琪も総出演している。しかし、一体なぜ蔡明亮監督は、突然の引退宣言を?

■中国語の「郊遊」とは?■

2009年4月から中国語の勉強をはじめ、2011年12月には中国語検定3級に合格した私には、本作の原題『郊遊』の意味はすぐにわかる。「郊遊(Jiao You)」を中日大辞典で引くと、その意味は、①ピクニック、②郊外遠足、③ハイキングと訳されている。「郊遊」がそういう意味なら、本作はとことんさわやかな秋の空と緑の中で展開される恋の花咲く青春映画?つい、そう思うてしまうが、それは全然逆だ。

第57回カンヌ国際映画祭で最優秀男優賞を受賞した是枝裕和監督の『誰も知らない(Nobody knows)』(04年)は、「西巣鴨子供4人置き去り事件」をモチーフにした映画で、父親からも母親からも見放された4人の兄妹が底辺でもがく、涙涙の物語だった(『シネマルーム6』161頁参照)が、本作も基本的にそれと似たような底辺の物語だ。

ピクニックでは太陽の下で広げる弁当の時間が最高の楽しみだが、さて本作に見る弁当の風景は?本作に見る「ピクニック」の弁当は、『誰も知らない』で子供たちがスーパーマーケットで賞味期限切れの弁当を狙っていたのと同じように、スーパーでの試食品が狙い。夜の路上でスーパーの賞味期限切れの弁当を2人の子供たちが並んで食べる長回しのシーンを観ていると、それだけで思わず胸が切なくなってくるが・・・。

■邦題は二転三転!英題は?■

今日の試写会で配布されたプレスシートには、邦題が『郊遊<Jiao You>』と書かれている。これは、今夏の公開においては「ピクニック」という、軽やかでうきうきしたタイトルは本作品にそぐわないのではないかと、ということで、『郊遊<Jiao You>』に変更されたためだ。ところが、本作のプロモーションのために来日していた蔡明亮監督のインタビューの中で、監督の意向を受けて、再び本作の邦題は『郊遊<Jiao You>』から『郊遊<ピクニック>』に変更されたい。蔡明亮監督の意向は「この映画は、家もなく、定職もなく、妻に逃げられた悲慘な人物を描いている、と思われるか

もしれないけど、私はそうは思っていない。人間は生きる＝生活するということに束縛されていると思います。李康生演じる父親は、ある意味で考えると、家賃を払わなくてもよいわけですし、子供たちは学校にいかなくてもよい暮らしをしているわけで、生活をするということから解き放たれているのです」ということらしい。このようにタイトルが二転三転することは時々あるが、さて、あなたは本作の「ピクニック」性をどう見る？

なお、本作の英題は『Stray Dogs』。これは「道に迷った犬たち」という意味だから、まさに本作の内容にピッタリ！私はそう思うが、さてあなたは・・・？

■□■登場人物たちの身分関係は？そんなものはどうでも■□■

冒頭、寝息をたてて眠る2人の子供の傍らで髪を梳かす女（楊貴媚／ヤン・クイメイ）が登場する。しかし、セリフは全くないから、これが一体何を意味するのか全くわからない。その後、「ピクニック」のシークエンスを経て、路上で不動産広告の立て看板を掲げて立つ男・小康（シャオカン）（李康生／リー・カンション）が、まだ小さい兄（李奕頤／リー・イーチェン）、妹（李奕婕／リー・イージェ）と3人で一緒に暮らす様子が描かれる。しかし、冒頭の女がこの2人の子供の母親なのかどうかもわからないし、小康が2人の父親なのかどうかもわからない。



(C) 2013 Homegreen Films & JBA Production
9/6(土)、シアター・イメージフォーラムほか全国順次公開！
9/6(土)、シアター・イメージフォーラム、シネ・リー플梅田ほか
全国順次公開！配給 ムヴィオラ

実は、この兄と妹を演じた2人の子役は李康生の甥と姪らしいが、本作の中ではその身分関係はわからないままだ。多分、蔡明亮監督にとっては、本作に登場する3人の女性と小康との身分関係などどうでもいい(?)のと同じように、小康とこの2人の子供との身分関係もどうでもいいのだろう。ちなみに、去る7月17日に言い渡された最高裁判決は、

父子の関係はDNA鑑定の結果が優先されるのか、それとも民法772条が定める法律上の「嫡出の推定」が優先されるのか、という論点について、「生物学上の親子関係がなくても子どもの身分の安定を維持する必要があるので、親子関係を取り消すことはできない」と法律を優先させる判断を下した。法律の世界ですらこのようにいい加減なのだから(?)、映画の世界ではなおさら、そんなものはどうでもいい・・・？

■□■廃墟、空き屋、野良犬・・・■□■

小康が本業としている(?)「人間立て看板」の仕事は日本にもあるから、これは大都会における一般的風景。しかし、これが人間的な姿と言えないのは当然だ。そこで、プレスシートを読むと、「10年前、私は台北の路上で、パッケージツアーの広告看板を掲げる男を見た。信号機のそばに立つ彼の姿を見て、私は驚き、質問が次々に浮かんできた」と書かれている。その質問は、①どれほどの時間、彼はそこに立っているのだろうか?、②稼ぎはいくらなんだろう?、③トイレに行きたくなったら、どうするのだろうか?、④友達や親戚に会ったら、どうするのだろうか?、⑤恥ずかしいと感じたりするのだろうか?、⑥どんなことを考えているのだろうか?等々だ。これを読むと、やはり「鬼才」と言える映画監督が感じるもの、考えることは違うものだということがよくわかる。さらに続く蔡明亮監督の、「彼はまるで、電柱のようで、壁のようで、木のようだ。誰も彼に気づかず、彼もまた気にかけない。それから間もなく、この産業は急成長し、不動産広告の看板を掲げる人間立て看板を至る所で見えるようになった。失業者はどんどん増え、彼らはこの新しい仕事に就いた。まるで彼らの時間を無価値にしてしまうかのような仕事に。ある考えが心に浮かんだ。シャオカンにそんな人物を演じてもらいたい」という説明を読めば、それだけで本作を監督した意図がわかってしまうものだ。

しかして、本作のテーマの一つは廃墟。小康と2人の子供は期限切れのスーパーの弁当を食べ、歯磨きも水浴びも公衆トイレを使っているが、さて眠る場所は?台北は台湾唯一の大都会だから、治安は東京並みに厳しいと思っていたが、本作を見ると、小康たちが恒久的に寝ぐらとする廃墟くらいはあるらしい。大都会・台北の裏に存在する廃墟。その空き家の一角で眠る3人の親子。廃墟にたむろする沢山の野良犬たち。その野良犬たちにエサをやりにくる女。スクリーン上には、ほとんど何のセリフもないまま次々とそんなシーンが長回しで展開されていく。ハリウッドのド派手なアクションや、過剰説明が目につく近時の邦画に慣れた目には本作を見続けるのはかなりしんどい。ある日小康は、自分が宣伝している高級マンションの中に1人で勝手に入り込み、真っ白い大きな部屋にある真っ白い豪華なベッドで眠っていたが、こりゃ一体どういうこと・・・?

本作が2013年の第70回ベネチア国際映画祭で審査員大賞をはじめ、数々の賞を受賞した理由を考えながら、スクリーン上で続いていくそんなシーンをじっくりと考えたい。

■□■キャベツのシーンは?この絵は?■□■

7月20日に観た、チリ生まれの監督アレハンドロ・ホドロフスキーの『リアリティのダンス』(13年)では、「何でもあり!」の技法に驚かされたが、本作では映画からの引退宣言をした蔡明亮監督の、ある意味で「居直り」とも言える姿勢が目につく。「作りたい映画」と「売れる映画」は違う。それは過去多くの映画監督が悩んできた「芸術主義(作品主義)」と「商業主義(もうけ主義)」との葛藤だが、蔡明亮監督もその点の悩みは大きかったようだ。そのことはプレスシートにある、「私は、映画に倦んでいた。近頃のいわゆ

る、エンタテイメント・ヴァリュー、市場のメカニズム、大衆の好みへの絶え間ない迎合、それらが私をうんざりさせた。私は、映画をつくり続ける必要を感じなくなっていた。もっと乱暴に言えば、観客をパトロンとして期待する映画をつくる必要を感じなくなった。私は自分自身に問いかけた。映画とは何なのか。なぜ映画をつくるのか。誰のためにつくるのか。大勢の観客とは誰のことなのか。観客とはスピルバーグ映画を見る人々なのか。率直に言って、私はこれらに何ひとつ興味ももてなかった」という文章を読めばよくわかる。しかして、蔡明亮監督は本作ではすべて自分のやりたいようにやったようだ。

たとえば、本作におけるキャベツを食べるシーン。これについて蔡明亮監督は「あるショットで、私はシャオカンにキャベツを渡し、カメラの前で食べてくれと言った。どんな演出をしたのかは覚えていない。きっと何もなかったのだろう。哀れみと後悔、悲しみと孤独、満足感と暴力性が噴出するような怒りの感覚をたたえながら、静かにキャベツを食べるシャオカンを私は見た。彼は静かにキャベツを噛み、愛と憎しみの混ざったこもごもの思いでキャベツを齧り、むしやむしやと食べ、食った。彼の人生の20年をかけて、彼はキャベツを食べた。シャオカンは泣いた。そして、私も泣いた」と述べているが、さて、あなたはこのシーンをどう見る？

さらに本作後半からは、蔡明亮監督が発見したという高俊宏（ガオ・ジュンホン）という画家が廢墟の壁に勝手に描いた風景画が大きなテーマになってくる。プレスシートによれば、これはジョン・トムソンという名のイギリス人が1871年に撮った古い写真をもとに描かれた一世紀以上前の台湾南部の原初的な風景を写した写真らしいが、さてその意味は？プレスシートの解説を読めば少しは「なるほど」とわかるが、スクリーンをじっと見ているだけで、そんなシーンの連続をさてあなたはどう感じる？

■ラストは、驚異的な長回しに・・・■

本作には、冒頭の髪を梳かす女の他、どこかしら気になるのか、妹の女の子の髪の毛を洗ってやるスーパーの女性店員（陸奔静／ルー・イーチン）の姿が登場する。さらに、本作ラストには、廢墟の中に入り、じっと風景画に見入る女（陳湘琪／チェン・シャンチー）も登場する。そんなラストに至るまでに紡がれる本作の「物語」(?)は、「髪を梳く女」「ピクニック」「路上」「空き屋」「野良犬」「キャベツ」「雨の夜の舟」「誕生日」「廢墟」だが、ラストは驚異的な長回しシーンになるのでそれに注目！

多分、誰もこんな長回しシーンを今までに観たことがないはず。そこで聞こえてくるのは、電車の音と、小康が時々飲む（多分）ウイスキーの音だけ。いつまでこのシーンが続くのか、と緊張しながら見入るはずだが、さてこのラストシーンはどのような形で決着を・・・？なるほど、これが鬼才・蔡明亮監督のラスト作品！そんな感慨を込めながら、改めて本作への賛否をしっかりと考えてみたい。

2014（平成26）年8月4日記